

若いお母さんたちへ

—子どもの成長・母の成長—

はるにれの会

川上 美子

倉橋惣三先生は、赤ちゃんの誕生と同時に母の誕生もあり、成長するのは子どもばかりではなく、母（らしさ）の成長もある、と言っておられる。もうすぐ第二子が誕生する。これを機会に、長男のT誕生から二歳五ヵ月の現在に至るまで、私が折々つけてきた記録を読み返してみた。すると、Tの成長と同時に、新鮮な驚きと発見、困惑と反省の連続であった私の歩みがあることに気づかされた。（成長といえるかどうか疑わしいけれど。）そして、新米の母親の私だったが、お互いに育ち合ってきたという実感を覚える。

Tとの二人だけの母子関係がもうじき終りになると思うと、第二子を迎える前にTとの生活を記録に留めておきたいと思った。その記録から、もうじきお兄ちゃんになるTの現在の状態を考えてみたい。

一、おなかに当る

記録(一) 四月十九日 (二歳四ヵ月)

(A)朝……Tは機嫌よく起きる。ところが私の用意した

トレーナーを着ないと言いはる。私が雨戸を開けると、自分で開けるというので、私はもう一度閉める。ところがTがやろうとするとうまくいかずキーキー騒ぐ。Tの薬を盃に作り、私がスプーンで混ぜようとすると自分でするといつて聞かない。「こぼれるから」といっても聞かないので、「飲まなくてもいい」と片付ける。もうだいぶ喘鳴が収まってきたので、一度位飲まなくてもよいと思つてした行動だったが、Tは取り上げられたと思ひ、ますます怒る。私は耳鼻科に電話をかけようとする。いつもするようにTの指を持って電話のダイヤルを回させる。ところがTは途中で切つてしまう。私はTから電話を取り上げ、ひとりでかける。Tは怒つて泣く。私は外出の用意を始める。T「Tちゃんも行く」という。私「病院だから、おばあちゃんとお留守番していい」と何回も言っているうちに、「ママ、バイバイ」と納得する。

私は二週間以上も耳鳴りが続き、うっ陶しい日々だった。朝のTとのまづいかかわり方が重なつたのも、私の

イライラした気分が影響している。それにしても、とげとげしい接し方は我ながらなさげなく、恥しい限りである。母親が精神的にも肉体的にも健康であることは、子どもと接する上で基本的に大切なことである。普段子どもの要求をできる限り満たそうと心掛けているつもりだった。トレーナーを着ないというのも、雨戸を開けたがることも今日はじめたことではない。自分でやりたがりたり、自己主張するのは、しばらく続いている傾向であった。いつもは余裕を持つて一歩子どもに譲れることが、今日の私にはできなくなつてしまつている。子どもと同じように張り合つていると、子どもの方も余計こだわり、ますます自己主張が強くなる。薬を混ぜることも調子のよい時は私に任せていた。電話を切るようなこともないはずだ。私はこじれないうちに、早くTの気持を受け入れて動けばよかつた。こうなつたらTと離れた方がいいと思ひ、というよりこんな自分と早くさよならするため、早く外出した方がよいと思つた。

(B) 昼食の時——Tは食べ終ると、隣の私の椅子へやつ

てきて、後に立ってトントンする。次に私の背中にベタッともたれる。舌で私の顔をなめる。キャラキャラ笑いながら。

(C)昼寝の時——私が横になっていると、私の体の上に乗る。私のおなかにトントンと当る。

(D)夜寝る時——私がふとんを敷こうとすると、Tはふざけてじゃまをする。私はマットレスを私の体の前に立てていると、おなかのあたりにトントンとぶつかる。私はドーンとマットレスでTを倒すと大喜びをして、またやって来る。寝床につき、私「赤ちゃん、オギヤーオギヤーって生まれて来るよ。いい子いい子してね」と話す。Tは「赤ちゃん、オギヤーオギヤー」といって私のおなかをさする。

朝のごたごたがあった後だけに、昼からは丁寧にTとつき合おうと思ひ帰宅した。私の椅子の後でトントンすると、おなかに響くが強くTには言わない。すると、Tはベタッと甘えてくる。昼寝の時も私の上に乗る、おなかに当る。ここでも強く言わない。これまでは「おなか

の赤ちゃんいたいいたいだから止めて」と即座に制止していたが、寝る時も私のおなかに当たってくる。こうしたおなかに当たってくる行動から気づくことは、ひとつは私が一番気にして、かばっているおなか(赤ちゃん)にぶつかって来ていること、もうひとつは、決してドーンと強く当たってくる訳ではないということである。つまりTはおなかの赤ちゃんは気になる存在で、真向うからドーンとぶつかりたい気持をTなりにセーブしているのである。私の体(赤ちゃん)のことを思い抑制しているのである。そういえば、私には二階の階段を下りる時おんぶを要求しない。馬乗りも父親や祖母には強く求めるが、私には私が四つん這いになっている時そっと乗ってくるだけである。そして、この頃目立った行動、つばをジュータンやおもちゃにかけたり、汚れた手で家族の体や洋服にわざわざぬぐったりするのも、抑制で萎縮した分を自分を外へはき出している、そんな気もするのである。また、これまで大好きでよくいっしょに遊んだ熊のぬいぐるみを、「ペン」といって叩き、その後すぐ「い

「いい子、いい子」となでている。この行動も「かわいい」という気持と何か屈折した思いが共存しているTの心を表現しているようにも思える。

二、「ママ遊ぼう」

記録(一) 四月二十五日

○午前中は近くの公園で、午後は私の用事でおじゃました近所のお宅の庭で、二歳〜五歳の子ども達に混じっ

てTは遊ぶ。

○夕方、私いつものように電車やバスのおもちゃを畳の上で走らせて遊ぶ。Tはお気に入りのバスを動かす。私には同じ大きさの別のバスを、自分のバスに寄り添うように、同じように動かすことを要求する。その通りにするとTはうれしそうである。またTは畳のふち布の上を大好きな電車を走らせる。私は踏切の棒を上げ下げする役をやらされる。遊びはしばしば続く。Tは眠そうになる。私は急いで夕食やお風呂の用意をしなくては



と思う。理由を話して私が立とうとすると、ひどくいやがる。お手洗いに行くこともいやがる。「ママ遊ぼう」と引つ切りなしに言う。

。隣の男児が道でサッカーボールをしているのが見える。Tはうれしそうに見ている。しかし私がその場を去ろうとすると、私に「いっしょに見よう」と、私がそばに居ることを求める。

。私は夕食の野菜を取りに庭に出る。Tも追って来る。空を見上げると月が出ている。T「お月さん、こんばんは」という。ポケの花が数輪咲いているのに、はじめて私は気づく。夕空に飛行機がとんでいく。

天気の良い日はできるだけ外に連れ出すようにしている。近所の公園には、午前中はTと同年齢の子ども達も来る。夕方昼寝が終わってから小学生もいて、Tは小学生に混じって遊ぶ。しかし子どもがひとりもいない時もあり、そんな時は私もTも何か遊びが乗らない。Tは「ママ遊ぼう」と私を相手に砂場やブランコやすべり台をする。私にTと同じようにブランコ、すべり台をする

ように求め、私も体にさわらない程度に従う。ところがひとたび子どもが来ると、Tの動きは変わる。時おり私を確認しながら、その子どもと動き出す。特定の友だちがいる訳ではなく、いつも顔ぶれは変わる。しかし、だれであっても顔ぶれは変わる。しかし、だれであっても遊ぶことは楽しいようである。相手があまりなじみのない同年齢の子どもであると、砂場でもちやの取りっこをしても、ひどいトラブルにはならない。砂場遊びもそれぞれ淡々としている。ところが、親しい間柄の子どもの場合はちがう。最近一番変わったのは、隣の男児Mとのかかわりである。三月頃までは、家に遊びに来てくれたり、公園で会うと大喜びでついてまわり、Mの言うことなすことをみんなまねをして大はしゃぎだった。ところが今は、Tの方がちょっとかきをかけて叩いたり、つねったりする。MがTのものを持っていると、取りかえそうと躍気になる。Mも取られまいとする。以前ならば遊びになっていたものが、トラブルになってしまふ。結局Tが泣き出し、せっかく遊んでくれようとし

ているのに、Mはそそくさと去って行く。「なぜかしら」とTの変化をMの母親に尋ねてみると、「(Tが)お兄ちゃんになるからでしょう」という答えが返ってきた。体験上言えることなのだろうか。確かにちよつとしたことですぐいさかいになるのは、兄弟げんかのようなものである。

Tが生まれから、MはTを弟のようによく相手にしてくれた。親しさが増してくると、MはTに対して年少者の扱いはなく対等のように体をぶつけ合っていた。私もTとかかわりながらも、Mとよく遊んだ。Tにとって親しいその子どもは、私にも親しい間柄で、それが気になる存在になってきたのだろうか。

大好きな電車と、バスがあり、寝る時も枕元に置いて寝る。自分以外の人がやたらに動かすと怒る。これらのおもちゃを床や畳に寝ころがって走らせる遊びは、ずーと続いている。最近では、まっすぐな物やまっすぐな所を見つけると、それに沿って走らせる。たとえば、ものさし、自分の箸、マットレス、レール、壁の下、家具のふち、ジュータンのふち等である。自分だけの思い通りに

動かす電車やバスは、自分と同等のもののように思えるが、こんなにもまっすぐな物に沿って、まっすぐ走りたいという欲求はなんだろうと不思議に思う。ひとりで遊ぶことが多いが、記録のように私を誘う時もある。そんな時は私はTの言う通りに動く。同じ大きさのバスを、Tのバスとびったり同じように動かしたり、Tの電車が通る度に踏切の操作をする。私がTの言う通りに動くことは満足そうである。私もTだけとゆっくりつき合う時間もこれから少なくなるだろうと思ひ、腰をすえてつき合う。私がつっかりTの方を向いてくれることは、Tにとって快いことだろう。それ故、私が少しでもその場を去ろうとすると強くいやがった。前述のMが外にいる時も、以前なら私に構わずMとかかわっていただろうに、この時は私にそばにいてくれるように求める。

Tの気持を受け入れれば夕食の用意はできない。私はうす暗くなった庭にそつと野菜を取りに出る。Tも後を追う。小寒い外気に触れ、閉ざされた空間から無限の空間に解き放されたような気がした。私の窮屈な思いも消

え失せた。高く空を見上げると、遠くにお月さんと飛行機が見えた。何とも言いがたい平安な雰囲気包まれ、Tも私もしばらくその空気に浸っていた。Tは眠気がふつとび、私は家に入って新たな気分夕食の用意に取りかかれた。

以上二つの記録をもとに、Tの最近の様子を考えてみた。まだ目に見えないけれど、赤ちゃんの存在がTの心に影響を与え、私や親しい子どもとの関係に波及していることが察せられた。こうしたTの思いを受け止め、お産の入院やその後の育児にも配慮したいと思うこの頃である。

さて、このシリーズに登場した方々の文章を読むと、その人らしい子どもの見方、接し方があることに気づく。私は日々の子育てで心掛けていることは、記録をつけておくことである。これは私が学生で実習生だった頃からの習性になっている。毎日欠かさず書く訳ではない。特に子どものことで印象に残った出来事、楽しそうに遊んでいる場面、はっと成長の芽に気づかされたこと

は、書き留めておく。子どもの身近にいるものとして、子どもの世界をかいま見せてくれることは楽しいことである。また、子どもの成長と共に、遊びも深まっていくのを見るのもうれしいものである。また、子どもの寝た後、ゆっくり日中の私の接し方を反省するために記録を書くこともある。まずいかかわり方をした日、またひどく感情的にふるまってしまった日などは、心安らかに寝れない。自分がその動きの渦中で何を感じてそうしたのかを文字に書きながらはき出す。冷静に客観的に自分をふりかえてみると、動いていた時には気づかなかつた子どもの動きや心が見えてくることもある。どうして子どもはそんな行動をとったのか、またその行動の意味は何なのか、その時点でいつも納得できる答えが思い当たるとは限らない。しかし、その時自分が何を思い感じて動いていたかは迎えるはずである。そして翌日からの接し方を工夫する手立てになる。Tが一歳すぎの頃から、私との関係でいやなことがあると自分の頭をドアや床にゴツンゴツンぶつける行動をし始めた。私に直接ぶつけて

こないこの行動は、私に背を向けた態度として受けとれた。この行動は三ヶ月以上続くが、幾度となく対応の仕方を考えさせられ、試行錯誤の連続だった。この気になる行動に対し戸惑いを覚えながらも、気持のぶつかり合いをするうちに、新たな状況が展開していった。そして、この過程を経て、Tと私が細かく気持を通わせ合うことができたと思う。こうした積み重ねが私の歩みであったと思う。印象深い出来事や楽しい遊びの記録、また困惑と反省の記録を、なかなかゆっくりと読み返す時間のゆとりがない。しかし、今まで何人ともなく出会ってきた子ども達との間で生まれた記録は、私の貴重な財産、宝物である。

記録二の最後の場面で庭に出て上を仰いだ時、Tも私もほっと解放された体験は、印象深い。あれかこれかの選択ではなく、無条件にパッと新しい世界が開かれ、Tも私も全く新しい気分になった。子どもと生活していると緊迫感もあるが、しかしある時予想もしない形で状況が好転することがある。何がどうしてという理由がつか

ない。生活自体がそういう要素を含んでいるのだろうか。子どもと生活を共にしていると未来が拓かれるということは、育つ力に託せる、委ねて生きることが保証されていると信じているからであろう。これは、私たち人間が自分で生きているのではなく、生かされている存在であることにも通じる事柄である。

もうじき第二子が誕生する。倉橋惣三先生が言っておられるように、その子どもにとって私はまた新しい母親の誕生である。子ども達と共に歩む良き母親の成長があるらんことを祈りつつ……。